

平成 26 年度中学校武道授業(弓道)指導法研究事業



索引きによる手の内の習得を目指す

平成 26 年度中学校武道授業(弓道)指導法研究事業〔主催＝(公財)日本武道館・(公財)全日本弓道連盟・日本武道協議会、後援＝文部科学省、協力＝勝浦市立北中学校〕は平成 26 年 8 月 18 日～20 日の 3 日間、千葉県勝浦市の日本武道館研修センターで実施された。

今年度で 5 回目を数える本研究事業は、研究者 7 名が、勝浦市立北中学校生徒 17 名(男子 11 名、女子 6 名)の協力を得て、より教育効果の上がる指導法を研究する目的で行われた。

■1 日目(8 月 18 日)

開講式では柴田猛(公財)全日本弓道連盟副会長があいさつに立ち「現在、全国で 13 校が全日本弓道連盟から弓具の提供を受け、授業で弓道を実施している。弓道の指導には力量がいる。短い時間の中で効果を上げるには教員の技量が必要だが、人間関係も大事である。しっかり研究して生徒に興味を持てるものにしてほしい。全日本弓道連盟としても学校授業で弓道を取り上げてもらえるよう努力していく」と述べた。

続いて、三藤芳生日本武道館理事・事務局長が主催者挨拶を行った。「中学校武道必修化が 3 年目を迎え文部科学省からの報告によると大きな事故もなく順調である。さらには礼儀が身に付いた、クラスにまとまりが出てきたなど良い報告がされている。現在 1 万余校で実施されている必修化の授業は 6 割強が柔道、3 割強が剣道、1 割が弓道他の種目となっている。そのうち 7%が複数種目を実施している。武道必修化



三藤理事・事務局長

に求められる教育効果は礼の尊重、道の文化などである。あとは体育授業なので特に弓道は運動量の確保が重要になる。弓道は中学生が対象の全日本少年少女武道錬成大会でも参加者は増加傾向にあり、指導法研究事業だけではなく、他の事業とのつながりを生かしていけば実施校が増えていくと考えられる。3 日間が有意義な研究の時間になるように期待する」と述べた。

引き続き、翌日のモデル授業のため、役割分担、指導上の注意点などの確認と射場設営を行い、初日の日程を終了した。

引き続き、翌日のモデル授業のため、役割分担、指導上の注意点などの確認と射場設営を行い、初日の日程を終了した。

■2 日目(8 月 19 日)

勝浦市立北中学校の生徒 17 名の協力を得て、5 時間相当のモデル授業を 2 グループ(①1 年生と女子を中心としたグループ、②2・3 年生を中心としたグループ)に分け行った。第 1 グループの担当は望月研究者、外部指導者として木村研究者、第 2 グループの担当は小川研究者、外部指導者として高橋研究者がそれぞれ実践例報告を踏まえたモデル授業を展開した。



第1グループでは、はじめに iPad による映像資料を使い、時間ごとの到達目標レベルの確認を行った。続いて運動量確保のため、準備運動に続き、弓道に必要な筋力を養うための体幹トレーニングを実施した。中学生は慣れない動きに戸惑いながらも楽しそうに取り組んでいた。

さらに、今回初めてグローブ式の弾（ゆがけ）を使用する試みがなされ、着装時間短縮など一定の効果が得られた。



第2グループは、ホワイトボードに弓具の部位の説明や動きを掲示する方法で基本的な知識の習得を目指した。また実技に移ると二人組になってお互いの射形の確認・修正など相互指導で信頼関係を築くための工夫をするなど授業者への配慮が見られた。最後の時間には実際に的の前に立ち、実際に矢を放つ一連の動作の確認を行った。中学生は矢が的に当たることで達成感を味わうと同時に弓道の楽しさを実感していた。

モデル授業終了後の中学生の感想（アンケート結果）に「矢が的に当たって気持ちよかった」、「自分一人で矢を放つことに喜びを感じた」、「矢を放す瞬間がすごく楽しい」などの回答が多く、研究者が思い描いた「弓道の楽しさに少しでも触れてもらいたい」というモデル授業が展開できたと担当した研究者は安堵の表情を浮かべていた。

■3日目（8月20日）

最終日は一原研究者と木村研究者のそれぞれの学校授業における実践例報告を行った。



一原研究者からは「本校は平成24年度に開校した創立3年目の新設校である。中・高一貫校でやっと中学1～3年生までそろったところ。新設1年目は男女ともに柔道授業を行っていたが、理事長からの『女子に弓道を選択させたらどう

か』との発言により弓道授業を実施することになった。実施するにあたり、平成24年に全日本弓道連盟より弓具の提供を受け、さらには学校に弓道場を建設してもらった。場所が学校から徒歩10分かかるし、充実した設備が整っているとは言えないが生徒達は楽しそうに取り組んでいる。今後はもっと勉強して生徒に研究成果を還元できるように努力していきたい」と報告があった。

木村研究者からは「外部指導者の立場で授業を受け持っている。最初は授業時間と弓具の確保から始まった。今では弓道の教育効果を認められ、体育館の空きスペースを弓具の保管場所として確保出来るまでになった」と自身の経験を語った。

閉講式では桑田研究者が「実のある良い研究授業になった。的前に立てるまでに生徒を指導できたことは先生自身も勉強になったと思う。授業を継続することは努力が必要だが、生徒の実力がついてきたら錬成大会にも出場いただきたい。これだけの充実した研究協議ができたことは大きい。今後ますます努力していきたいと思う」と講評を述べ、3日間の研究事業を締めくくった。



◇研究者

桑田 秀子（全日本弓道連盟 特別委員）
高橋 良子（全日本弓道連盟 特別委員）
福田ふみよ（全日本弓道連盟 特別委員）
望月 尚志（片山学園中学校 校長）
小川 睦子（盛岡市立城東中学校 教諭）
木村 功（橋立中学校 外部指導者）
一原 悦子（MIHO 美学院中等教育学校 教諭）

◇連盟事務局

清水 政範（全日本弓道連盟 主任）
高水 大輔（全日本弓道連盟 主事）

◇日本武道館事務局

吉川 英夫（振興部長）
石井 政利（振興部振興課 主任）（敬称略・順不同）